あいち民研

あいち県民教育研究所
第１８０号
２０２０年7月5日

巻頭言

新所長就任のご挨拶

大橋 基博（あいち民研新所長）

6月21日に開催されたあいち民研所員会議で、退任を表明された榊達雄所長の後任に選出されました。これから3年間、この任に当たることになります。いまその重責をひしひしと感じています。会員の皆様、関係団体の皆様、どうかよろしくお願いいたします。

あいち民研の歴史は1990年1月9日の集まりから始まります。その日は、小川利夫、佐々木享、折出健二、山田正敏、山田信克、松久直史、井上淑、村田徹也の諸氏が集まり、民研の性格などについて意見交換したと記録されています。その後、渡辺靖敏、百々康治、山本栄八、村田徹也の4氏で事務局を構成し、9月12日に第1回準備会が開催されました。私は、翌91年2月4日に開催された第4回準備会から参加しています。

何かのご縁であいち民研の草創期から関わってきましたので、所長就任にあたりこの30年の歩みを振り返っています。91年7月13日に発行された通信第1号で、村田さんは、なぜ「県民教育研究所」が必要かについて、「子ども・青年が健やかに育つことを願っているすべての人達が対等に、自由に、しかも持続的に討議できる組織がぜひ必要である」と考えたことと、今日の問題を解決するためにはいろいろな立場の人が一つの問題について継続的に研究していく必要があること、愛知の教育を父母・県民のものとするため、と語っていました。

理事長に選ばれた山田正敏さんは「当研究所が、多くの県民の参加により、愛知の地に根ざして、子育てと教育の錯覚を問い直し、国際的視野で原則を究明し、思想・信条を越えて『心身ともに健康な国民の育成とは何か』を学び合い、革新と合意づくりの場」になることを期待すると述べていました。研究部長の折出さんは、「県民自身が『人を育て、育ち合う』主人公(池上惇の言葉)になるような教育創造をめざしたい」と語っていました。事務局長の私は、会員の拡大(200人を目指す)、広報活動の充実、研究所の民主的運営システムの構築を課題として設定していました。

30年前に指摘された課題は今日においても追求すべき課題です。歴代の所長(創設時は理事長)はそれぞれの個性を生かしたアプローチを試みられていました。山田正敏さんは、保護者の子育ての在り方を深く考えられ、同時に民間の教育サークルの活動も支援されていました。折出健二さんは、子ども・青年の人間的発達に寄り添い、共感し、併走する調査・研究を強調されていました。榊達雄さんは、日本国憲法、1947年教基法に基づいた教育の在り方を一貫して追求されてきました。

私は3人の姿勢を継承しつつ、教育・子育ての現場の声を集めることを重視していきたいと考えています。そのために会員の皆さんの積極的な発信をお願いしたいと思います。教育・子育ての現場でこんなこと、あんなことが起きたという発信、それが教育研究の重要なエビデンス(証拠)になります。このような現場の実態に即した教育研究を追求したいと思います。また、あいち民研の活動に参加することへの敷居の高さ（とくに研究部会への参加）をなくすようにしたいと思います。あいち民研は会員一人ひとりが調査研究活動の主体です。これからも引き続きご協力をお願いいたします。